

氏名 小塚 直斗
 ヨミガナ コヅカ ナオト
 学位の種類 博士（美術）
 学位記番号 博美第554号
 学位授与年月日 平成30年3月26日
 学位論文等題目 〈論文〉 「空間論」
 〈作品〉 「2017—2018」
 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	秋本 貴透
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	須賀 みほ
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	齋藤 芽生
（副査）	園城寺	執事長	（）	福家 俊彦
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

私は現代で制作を行うことの必然として絵画を疑い時に否定すること、その行為の中で絵画そのものの存在を考察することが新しい表現を作り出すと考えていた。しかし否定も肯定も行ううえで前提としている「絵画」の意味が2011年からの日本美術との出会いの中で大きく変化した。桃山時代の空間は、現代で絶えず行なわれる絵画考察によって構築される造形とは異なっており、意味に依存せず自然に自由にそして理性的に表現されることを数年の調査の中で知った。現代に生きる制作者として、かつて日本にあったこの複雑な構成を造形的側面から研究し、捉え直す必要があると考えている。それは私にとって自身の制作の基盤をつくる試みである。しかし現状において日本の造形を実際場で体感できる場所は少なく、また常に変化する空間性を視覚化した資料は極めて少ない。近年、作品保護の観点から作品は本来の場所から剥がされ、鑑賞者の所作、環境や場そのものを作品性としたかつての造形を体感することはなくなってきている。

現代的手法によって作品の資料化や置き換えが行われているが、日本美術におけるデジタルアーカイブの際に用いられるカラーマネージメント技術は曖昧であり、環境、場といった、本来、日本美術にとって根幹をなすテーマを考察していない。現在のデジタルフォト、画像記録、出力、カラーマネージメント、デジタルアーカイブの技法と思想は西洋の影響が強く、真に日本のかつての造形を考えようとするならば、現在と異なった視点で技術を確立しなくては、その考察と視覚資料化は不可能であると考えられる。造形研究には自ら画像資料を作成することが必要であり、またその行為そのものが材料や空間論を構築するための研究手法となる。

本論は明治までの日本美術、思想、材料が抱えていた「空間」を、デジタルや現代の思想の中で相対的に比較し考察するものであり、現代が得たもの、失ったものを桃山の空間と材料の中に見出す試みである。

第一章では国宝都久夫須麻神社、南禅寺天授庵、国宝園城寺勸学院、国宝園城寺光浄院の撮影調査と考察をもとに自身の立場から材料と場との関係を論じた。現代の材料との対比、デジタルメディアとか

つての桃山の表現との対峙の中で見えてくる空間性の違いを実際の経験、調査記録資料をもとに述べた。

第二章では、琵琶湖について考察を行なった。材料が環境と結びつきイメージと広がり人を人に与える経験を琵琶湖と竹生島で得た。その光景を画像とともに述べる。

そして第三章では「光浄院」で行った実践的考察について論述した。美術館を想定した絵画表現ではなく、床の制作を行う。材料と場、時間と表象の関係を現代美術、哲学、自己の中で展開させず実際の日本美術の空間と対峙し展開させる。共感ではなく共有できるリアリティーを数年の様々な研究調査、創作の中で模索した。それは素材そのもの、メディウムそのものを人と場の間に如何に美しくインスタレーションするかであるが、場の中で一番に表現と関係するのは支持体とメディウムである。どのように意味や論理、言葉で関係させようとも自己の外に広がる環境は、表現者の意図とは無関係に線や形を弱くし意図した色彩と異なった結果を場に示す。このように絵画の枠組みが保障されない環境で、自己からの意味づけではなく素材そのものが持つ性質と思想を考察する。

私は自身の表現と調査研究にデジタルを使用してきた。絵画をデジタル化する場合や、絵画と自分との間にデジタルメディアを介在させる際に生まれる違和感や構造の差は現代において新しい絵画の可能性であると感じていた。しかしながら、日本の造形を前にしたデジタルはあまりにも脆弱であり、その差異は「絵画」そのものの強さを反対に証明していた。

Lab、RGB、CMYK、色温度などカラーマネジメントの概念がなかったかつての色の表現を見る時、素材の扱い方、美意識、ダイナミックな「空間」の構築には現代との隔たりがある。現代日本画の主流となる膠とは異なるメディウム表現の中にある「空間性」がRGB、Lab以上の色域の表現を可能にし、数十億画素の「高精細」な画像と比較にならない多くの質感を場にもたらし、場との関係で絶えず変化する絵画構造は、顔料一粒にまで一貫した「空間性」を持ち、現代の均一化された濁りのない顔料やメディウム、美意識とは異なり空間で反応し環境と混ざり合う。その空間は竹生島や琵琶湖のように広大な広がり深い無限の奥行き、物質をこえ果てしなくつながるときを、ひとの身体とところに与える。

しかしかつての日本美術の完璧なレイアウトと材料を現代で繰り返すことは不可能であり意味をなさない。様々な歴史と思想の混同や、物質、産業、化学としての材料の衰退と発展の中、考察と反省を繰り返し可能になる現代の新しい絵画を構築することが今必要である。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、現代の制作者の視点、興味、そして手法による優れた日本美術研究である。内容は大きく二つに分かれ、前半に調査、撮影の工程の記録、後半にそれに基づいての考察が記述される。

2011年からの6年間にわたっておこなわれた17世紀初頭の諸作例の調査撮影記録は、従来に例を見ない精密さをそなえると同時に、制作者としての論者がまさに作品の表現の中に入り込むようにしてなされたものであるがゆえの新鮮な発見に満ちている。研究にともなう視覚資料の制作においては、実物を「再現」するのではなく「表現」するにはどうすれば良いのかが、新旧の機材を駆使したあらゆる方法の取捨選択の中で追究される。数百年前の顔料や膠、墨、あるいは紙といった材料、またそれによってあらわされた表現を現代の視点から現代の素材によって置換する試みが、結果としてその実体の精緻な把握につながっている。

この徹底した観察に基づいて、後半では論者の実制作を視野においた材料、描法、構成、そして画面の形式の考察がなされる。制作者の立場からの美術研究が美術史の分野における研究と根本的に異なる点は、目の前にする描線や彩色、構図や質感のすべてが自身の問題そのものであるということである。前半の作品の調査研究において論者は、かつての作品の構造に入り込みつつ、そこで常に自問自答を重ねていたことがここに明らかになる。

日本美術、と称するときには必ず前提としてあらわれる「日本的なもの」とは何かという問題、本論文にはそれに向けての一つの答えが記されている。それは従来常になされてきたような西洋との、あるいは中国との対比で示されるものではなく、昔も今もない、ある絵画行為の中の尊い思索とも言うべきものを追究し実感する中で導き出される、日本という風土であり、人々の培ってきた思想である。

作品をモノ、と称する研究者には立ち入ることのできない世界に立ち入り、制作者の視点からでしかなし得ない考察が行われた、本論文は本学の博士学位に相応しい論文であると考える。

（作品審査結果の要旨）

小塚直斗は大学院修士課程時代に絵画の具象表現を追求するため、西洋古典描画技法の研究と平行しつつ現代デジタルメディアがもたらす視覚体験を様々な方法で試み始めた。デジタル世界の非-身体的なまでの視野がかえって、人間本来の身体を通過した視覚とはどのようなものなのかという原初的な疑問を彼の中に呼び起こす。自分の繰り広げる絵画空間のなかで、どこまで自分の「見た」視覚を証明し、また絵画用材のあらゆる物質を駆使してその視覚を「見せる」のか。修了作品の圧倒的に微細な人物像描写からは、彼のその時点での答えへの格闘が読み取れた。

しかし博士進学後の彼の長い格闘と試行錯誤は、さらに紆余曲折したものとなった。それまで撮ることと描くことのあいだにあった適度な距離感をまるでかなぐり捨てたかのように、はたから見れば描くことをもうやめてしまったかと思えるほどの勢いで、個人の枠を超えたデジタル撮影の現場に身を投げ込んだ。撮影と調査の対象は、桃山期の建築構造の中に実在する日本の絵画であった。いや日本の「絵画」という言葉は適切ではない。「絵画」という概念のない時代の世界観のなかに顕現された造形物とそれを取り巻く風土に対峙しつづけ、「絵画」という言葉の意味はもちろん、「見る」ことの奥行き、「見えるもの」「見えぬもの」との距離感覚、造形が何のためにどのように人の生きる空間と混在するのか……つまりは、視覚ばかりではない「身体全ての把握のし直し」を迫られたのだろう。本論文はその期間の調査の詳細極まるデジタル技術の試行錯誤が冷静に綴られているが、その恐ろしいまでの執念の中で絞られた選択肢、選ばれた技法の列挙を見るだけで、実にスリリングな身体感覚の変遷の記録として読むことも出来る。

今の時点での彼のデジタルに関する研究と東西の絵画技法材料のに関する研究を重ねあわせた取り組みは、彼自身も調査に加わったことのある「国宝・園城寺光浄院の実空間に存在させるための絵画」の制作というかたちで結実した。書院造りの床の壁面は、西洋における絵画展示の概念とはかけはなれた機能を持つ。床の空間は部屋の機能とともに内部とも外部ともつかない曖昧さをもったものであり、そこには日本人の身体にやどる言葉にならない「間」の透明な集積が既にある。その透明な何かとは、実質的な湿度や季節の空気や匂いでもあれば、自然と人間生活の距離感覚のようなものでもあれば、非在の中に存在を感じ取る信仰的靈感のようなものでもあるだろう。そのようなものと自身の身体感覚のやり取りを時間の縦糸とし、デジタル撮影の経験で掴んだ環境と光の問題、技法材料の研究経験で掴んだ環境と素材の問題を緯糸として、緊密な織物を織り上げるかのように、またはその折目に「物質の本性」をじわじわと滲ませるように、彼は考察を重ねた。予め絵画制作のために様々な取材をしたのではなく、考察を重ねた経験そのものが絵画のかたちで結実したのである。

実際彼のつくり出した絵画は、既知の日本絵画や西洋古典絵画の単純な視覚イメージのどちらにもそぐわない不思議な「手ざわり」を持つものとなった。一抹の光の鈍い乱反射を予期している薄闇、微塵の霧雨の湿気、歴史とともに変質していくことを引き受けた生命の落ち着いた呼吸、そういうものを感じさせる複雑な造形への取り組み。その取り組みの美しくスリリングな成果に対し、高い評価を全員一致で与えた。

（総合審査結果の要旨）

絵画という概念のなかった時代の表現に、現代にも通じる絵画思考の本質を見出したことから私の研究は始まる。これは申請者、小塚直斗の言葉である。

日本列島は山林に覆われ、豊かな四季によって多元的価値を持った風土である。自然は美しく、神々や先祖の気配、見えないものを感じさせる一方で、地震や台風など天災が多く恐ろしくもある。そこで育まれてきた自然観には、永遠なものはなく常に変化し、形あるものは必ず朽ち、人間は生きたら死ぬ

といった無常観を許容して、文化やものづくりを積み重ねてきた。

寺や神社といった書院造りに代表される伝統的な日本建築は、壁を重視しない柱構造で可動性のある襖によって境界は移動し、軒、縁、障子など家屋の内部と外部を遮断せず、襖や天井に季節の草木や山川、人物などが、もののあらわれとして描かれる。それらすべての関係性によって内在化された自然観が創りだされ、主も客もない自然に従う、自然と同化する場となる。

申請者は、2011年より滋賀県竹生島の都久夫須麻神社、京都府京都市の南禅寺、天授庵、滋賀県大津市の園城寺、勸学院、光浄院で撮影調査を行ってきた。桃山時代の造形を実際場で体感し、働きの相互作用によっておこる、その場に生じているのが桃山美術の造形空間の根幹をなすものと、制作者としての身体をとおして直感した。

博士提出論文、「空間論」は、第1章で撮影調査の具体的事例をもとに、桃山美術が抱えていた空間を、現代のデジタル思想の中で相対的に比較、考察され、デジタルフォト、画像記録、出力、カラーマネジメント、デジタルアーカイブの新たな可能性、方向性が導き出されている。第2章では、数年間調査してきた竹生島の都久夫須麻神社と琵琶湖の自然から、環境と材料の関係が考察され、その背後にある湿度の質の差が文化の質の差異であることが暗示されている。第3章において、実践的考察を園城寺、光浄院で行うための床の制作において、材料そのものが持つ性質、支持体、展色剤が場の中でどのような意味を持つものかが論じられている。材料と場、時間と表象の関係を日本美術にある新しさの中に、制作と研究を見直す試みの実践を「空間論」として構築した。

博士提出作品「2017-2018」は床の作品と、園城寺、光浄院に設置した場の映像と琵琶湖の映像で構成されている。園城寺、光浄院で作品を見てみると、床は場であり、箔は面影であり、絵具はかさねであり、筆づかいは行為そのもの、状態そのものが場にある感覚を覚える。美術館では出現しない、その場にうつろう時間を入れることで場を抽象化し空間を立ち上がらせる。

博士提出論文、博士提出作品は、論文副査、作品副査、外部副査からも博士学位として認められる論文、作品として高い評価を受けた。

申請者の表現は今ここから始まったばかりである。